



国立感染症研究所
感染症情報センター

English

国立感染症研究所のページへ | 感染症情報センターについて | 引用リンクについて | サイトマップ

ホーム

疾患別情報

サーベイランス

各種情報

新興感染症 | 予防接種 | 人獣共通感染症 | 節足動物媒介感染症 | 寄生虫症 | 輸入感染症(旅行者感染症) | 腸管感染症(食中毒を含む) | 小児の感染症 | 眼の感染症 | 性感染症(STD) | 日和見感染症 | 薬剤耐性菌感染症

> 疾患別情報 > パンデミック(H1N1)2009 > IDSC 更新情報

パンデミック(H1N1)2009 Pandemic (H1N1)2009

IDSC 更新情報

神戸市および兵庫県における新型インフルエンザ集団発生疫学調査
 報告



第1部
 全体像編

2009年8月31日

国立感染症研究所 実地疫学専門家養成コース(FETP)
 国立感染症研究所 感染症情報センター

全文PDFファイル(972KB)

※ダウンロードはこちらから

第1部要約

新型インフルエンザの発生状況を把握し、臨床・疫学的特徴を明らかにし、感染拡大防止対策につなげるために、神戸市、兵庫県における新型インフルエンザ患者からの聞き取り調査や神戸市保健所等からの情報収集を行った。

神戸市も含めた兵庫県全域で、新型インフルエンザの確定例(定型・非定型)は6月5日までに199名(男性65.3%、女性34.7%)、15~19歳が71.9%を占め、感染の中心は高校生であった。兵庫県における流行曲線では、5月5日発症の確定患者が初めて検出され、5月17日にピークを形成した後、兵庫県全域で実施された学校休業に伴い症例数は減少した。神戸市で最初の確定例が確認された5月16日には、兵庫県いくつかの地域ですでに確定例が認められた。

初期に入院した患者49人について、発熱、咳、全身倦怠感、咽頭痛を示すものが70%以上に認められた。48例に抗インフルエンザ薬が投与され、1週間以内で症状が軽快するものがほとんどであった。患者の大半は感染症法に基づく入院で、基礎疾患のない若年者に集中しており、人工呼吸管理を要するような重症例は認められなかった。

感染源及び接触日が特定できる事例から、二次感染が疑われる事例は除外して検討したため短めに評価されている可能性があるが、潜伏期は1~4日(中央値2日)と推定された。同居家族全体における発症割合は7.0%であるのに対し、10~19歳では21.6%と高かった。初発患者が発症してから家族内発症者の症状出現まで、中央値3日(範囲1~5日)であった。同居家族における感染者は接触者調査時すでに発病するなどして、予防内服は実施されていなかった。初発患者の症状出現から2日以内に予防投与が開始されたものは29%にとどまったが、予防投与が実施されたものから発症者はなかった。

神戸市環境保健研究所でRT-PCRにより検査された検体の新型インフルエンザ(A/H1N1 pdm)陽性割合は、15-19歳の年齢階級で高かったが、他の年齢層に感染が拡大する所見は確認されなかった。

流行の早期探知、重症患者の検出のためのサーベイランスの強化、予防投薬の実施体制の整備、関係機関での情報共有と連携、リスクコミュニケーションによる情報・知識の共有が望まれた。

(2010/1/7 IDSC 更新)

* 情報は日々更新されています。各ページごとにブラウザの「再読み込み」「更新」ボタンを押して最新の情報をご覧ください。

Copyright ©2004 Infectious Disease Surveillance Center All Rights Reserved.



IDSC
Infectious Disease
Surveillance Center

国立感染症研究所
感染症情報センター

English

国立感染症研究所のページへ | 感染症情報センターについて | 引用リンクについて | サイトマップ

ホーム

疾患別情報

サーベイランス

各種情報

新興感染症 | 予防接種 | 人獣共通感染症 | 節足動物媒介感染症 | 寄生虫症 | 輸入感染症(旅行者感染症) | 腸管感染症(食中毒を含む) | 小児の感染症 | 眼の感染症 | 性感染症(STD) | 日和見感染症 | 薬剤耐性菌感染症

> 疾患別情報 > パンデミック(H1N1)2009 > IDSC 更新情報

パンデミック(H1N1)2009 Pandemic (H1N1)2009

IDSC 更新情報

神戸市および兵庫県における新型インフルエンザ集団発生疫学調査報告



第2部
学校編

2009年8月31日

国立感染症研究所 実地疫学専門家養成コース(FETP)
国立感染症研究所 感染症情報センター

全文PDFファイル(2.25 MB)

※ダウンロードはこちらから

第2部要約

(1) 学校における積極的疫学調査

兵庫県における新型インフルエンザの感染の中心は高校生であった(本報告書第1部を参照)。よって、学校における発生状況を把握し、疫学的特徴を明らかにすることにより感染拡大防止対策につなげることを目的として、確定症例が初期に発生した3つの高校在籍者および教職員(A校/B校/C校)を対象に質問票による積極的疫学調査を行った。3つの学校はほぼ同時期より流行が始まっていたが、それぞれの学校におけるイベントや生徒の活動状態により異なった流行の様相を呈していた。なかでも学校全生徒の集合するイベントが感染拡大には大きな影響を与えていたことが示唆された。

(2) 学校休業の記述的評価

積極的疫学調査が実施された3つの学校に加えて、その他の学校においても記述的に学校休業の効果の検討を行った。神戸市の学校における確定症例についての流行曲線より、学校休業は流行の広がりを阻止するのに有効であったと考えられた。

(3) 兵庫県における学校間の疫学的リンク

今回の兵庫県において確定症例の発生した学校のうちいくつかの学校は、部活動のつながりで疫学的リンクを説明することが出来た。部活動内でのどのような具体的な行動・活動が、感染拡大に寄与したのかは、調査を行えておらず、不明である。また集団発生があった大阪の高校とのつながりは不明であった。

(4) 学校での感染拡大を防ぐための取りくみ

日常からの感染予防対策の実行、生徒・保護者への感染症知識の提供、校内での異常の早期探知と対応への取り組み、保健所など関係機関との連絡強化が望まれる。

(2010/1/7 IDSC 更新)

* 情報は日々更新されています。各ページごとにブラウザの「再読み込み」「更新」ボタンを押して最新の情報をご覧ください。

Copyright ©2004 Infectious Disease Surveillance Center All Rights Reserved.